

「地域サークル史」 第31回

『生活教育』8月号特集はここ数年、夏の研究集会を開くサークルが担当し、その地域の生活教育実践の特徴がつかめるものとなっている。教育実践の背景となる社会状況は、集会での講座、分科会等で知ることになるが、月刊誌においても、その地域の実践史や理論史などどうふまえているのか、地域の教育実践を、歴史や理論という〈線〉や〈面〉でとらえる研究成果が載ることを期待している。

沖縄だと、宮城アケミさんが山口の外山英昭さんと学び合いながら、地域とかかわる総合学習を展開したが、そういう実践史やその時の思いを知ると、沖縄での〈今〉の実践の持つ意味がより重みをもって理解できると思う。

愛知については、今号で、山田隆幸さんが自分史と重ねて、実践史・運動史の研究成果の発信をはじめた。今号には載っていないが、「バズ学習」もかためての「学テ」とのたたかいは、現在の「学力テ

スト」などを考える重要な視点を提供する。

金森俊朗さんも、自分史を客観的に位置づけて、金森実践を底支えた先行実践が生活綴方であり、またそれが生活教育の一つの太い柱であることを明らかにし、〈実証〉している（辻直人共著『学び合う教室』）。先日9月9日に行われた公開授業で

は、「北海道綴方教育連盟事件」についてとりあげたそう（日生連会員メーリングリストで佐竹直子『獄中メモは問う——作文教育が罪にされた時代』の紹介）、これがきっかけで、石川サークルだけでなく、北海道の実践者・研究者がこの事件を研究し、そこから今の北海道の実践の意義を深める論考がでることを期待する。（研究部・加藤聡一）



参考文献

- ①宮城アケミ『地域と関わる 沖縄発総合学習 大好き与那原湾 山原船がきた海辺の町』民衆社、2001年、特に186、191頁。
- ②前田賢次『北海道の生活教育 その現状と課題』、北海道生活教育研究会編『地域で学ぶ、ここに生きる子どもと教師』北海道の生活教育実践〜2005年。